

第26回国際河川シンポジウム 参加報告 ～国際交流活動 ARRN活動報告～

自然環境グループ 研究員／日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）事務局 森本 洋一
審議役／日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）代表理事 土屋 信行

1. はじめに

日本河川・流域再生ネットワーク（通称JRRN）は、良好な河川の保全・再生が創り出す健全な水循環系及び歴史・文化と共存する地域社会の実現に向け、河川再生について共に考え次の行動へと後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に¹⁾、2006年（平成18年）11月に設立されました。地域発、地域協働の手作り型の自然再生である『小さな自然再生』のバックアップなど、地域に根差した活動を行っているのが特徴です。また、JRRNはCRRN（中国）やKRRN（韓国）といった、アジア各国の河川・流域再生のネットワーク組織が参加するARRN（アジア河川・流域再生ネットワーク）の日本の窓口としても重要な役割を担っており、毎年、ARRNのフォーラムや運営会議へ参加しています。本稿では、令和7年9月にオーストラリアのブリスベンで開催された国際河川シンポジウムでのARRNの技術セミナー及び運営会議について報告したいと思います。

2. 第21回水辺流域再生国際フォーラム

第21回水辺流域再生国際フォーラム（以下「国際フォーラム」という）（図1）は、第26回国際河川シンポジウム（International River Symposium, IRS）の1つのセッションとして行われました。国際フォーラムでは、ARRNメンバー以外からの参加者も多くみられるなど、活発な議論が展開されました。

日本からは、①『Successes and failures of river restoration in Japan.（日本における自然再生の成功と失敗）』（発表者：土屋代表理事）（写真1）と、②『Suggest of a new river environment management method based on understanding river topography and land cover conditions through remote sensing.（リモートセンシングを用いた河川地形及び地被状況の把握技術に基づく、新たな河川環境管理手法の提案）』（発表者：森本洋一）（写真2）の2件の発表を行いました。①の発表では、江戸時代や近世以降の日本の川づくり（治水、環境、親水）等の事例を通して、自然再生の成功例と失敗例を報告しました。聴衆からは、日本の川づくりの歴史や環境、親水面で



ARRN
Asian River Restoration Network

Program for the 21st Technical Seminar of ARRN

Topic: Ecological healthy rivers support sustainable social development

Time: 13:55-16:20, September 8th, 2025

Venue: STAR Brisbane, Australia

Organizers: Asian River Restoration Network (ARRN), China Institute of Water Resources and Hydropower Research (CIWHR)

Time	Presentation and Q&A	Speaker	Moderator
13:55-14:00	Introduction		XU Fengran Professor CIWHR (CRRN)
14:00-14:20	Successes and failures of river restoration in Japan.	TSUCHIYA Nobuyuki Ph.D. Chairperson of JRRN Japan Riverfront Research Center (JRRN)	
14:20-14:40	Comprehensive river restoration plan centered on covered urban streams.	JIANG Suk-Hwan Professor Daegu University (KRRN)	
14:40-15:00	Ecosystem responses to aquatic vegetation restoration and biomanipulation strategies in shallow lake.	ZHANG Jing Professor CIWHR (CRRN)	
Coffee/Tea break (10 min)			
15:10-15:30	Suggest of a new river environment management method based on understanding river topography and land cover conditions through remote sensing.	MORIMOTO Yoichi Researcher Japan Riverfront Research Center (JRRN)	ZHANG Jun Researcher CIWHR (CRRN)
15:30-15:50	Development of a SVM and establishment of consultative group for emergency response to water shortage.	LEE Jee-Kyoung Professor Daegu University (KRRN)	
15:50-16:10	Systematic Assessment of Ecosystem Service Values of Water Conservancy Projects.	ZHANG Jun Researcher CIWHR (CRRN)	
16:10-16:20	Closing and Group Photo		

図1 国際フォーラムのプログラム

の配慮、どのように川を良くしてきたのか等について、活発な質問が飛び交い、オーストラリアにおいて日本の川づくりへの関心が高いことを伺い知ることができました。②の発表では、地形データの取得方法や河川の生息場の評価方法といった具体的な質問があり、オーストラリアにおいても、新技術の活用について関心が高いことが伺えました。

3. 第19回ARRN運営会議

ARRNの運営会議は、クイーンズランド工科大学のOld Government Houseで行われました（写真3）。会議では、前回の運営会議以降のARRNや各国のネットワークの活動内容を共有することから始まり、最後に、ARRN事務局の中国から韓国への移管を行いました（写真4）。また、CRRNから、『アジア河川賞』の設置に関する提案があり、今後、具体的な検討をしていくことが決まりました。



写真1 土屋代表理事の発表の様子



写真2 筆者（森本）の発表の様子



写真3 運営会議の様子



写真4 CRRN から KRRN への事務局の移換

4. 国際河川財団との覚書の調印

河川再生に関する知識や技術の交換、河川の健全性、生物多様性の促進をはかるために、ARRNとIRF（国際河川財団）との間で覚書が交わされました。この中では、協働のワークショップの開催や国際河川賞の選考・審査への協力、共同研究の促進等が盛り込まれています（写真5）。



写真5 ARRN と IRF の調印式

5. ブリスベン川の視察

国際河川シンポジウムに合わせて、ブリスベン川の視察を実施しました。ブリスベンではブリスベン川を利用した水上バスが、公共交通機関として普及しています。川沿いには公園や船着き場が整備され、ブリスベン市民にとって河川は無くってはならない存在であることがわかります。またブリスベン川は連続堤防が無く（必要に応じて特殊堤が整備されている）、川と町、そこに住む市民がとても近くにあることが伺えました（写真6）。一方、ブリスベンでは、2022年に大きな水害が発生していますが²⁾、築堤などの治水対策は行われていないように見受けられました。このことから、日本とオーストラリアでは、市民の“川”に対する考え方が異なっているように感じました。



写真6 川からみたブリスベンのビル群

参考資料

- 1) 日本・河川再生ネットワークホームページ
<https://www.rfc.or.jp/jrrn.html>
- 2) クイーンズランド州ブリスベン市で発生する洪水被害～ブリスベン市役所による対応を中心に～, Clair Report No.547, (一財)自治体国際化協会 シドニー事務所, <https://www.clair.or.jp/j/forum/pub/docs/547.pdf>